男女共同参画を考える情報紙

あの・なはん

No.77

あの・なはん　盛岡弁で「あのねぇ」と呼び掛けることば

「あの・なはん」はボランティアの「あの・なはん編集員会」が編集しています。担当：男女参画国際課☎626-7525

時代と共に変わる
結婚事情

若者の未婚率が増えている一方で、18～34歳の独身男女の約90％が「いずれ結婚するつもり」※と答えています。そこで今回は、昭和の後半と現代とで、若者の結婚を取り巻く社会事情と意識の変化を男女共同参画の視点で探ってみました。

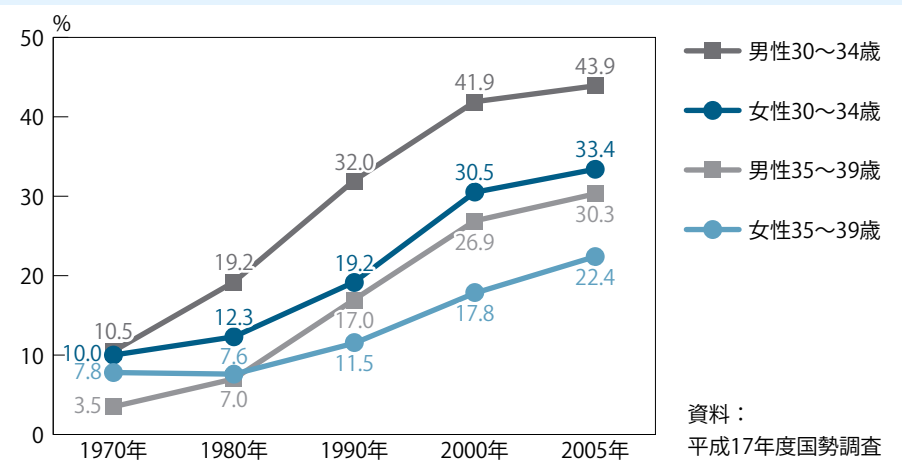
※国立社会保障・人口問題研究所「平成17年度出生動向基本調査（独身者調査）」

■増える30代の未婚率

右のグラフは、市内の30代男女の未婚率を示しています。1970年から2005年までの35年間で約３～９倍に増えています。なぜ、未婚率が高くなっているのでしょうか。

下の年表で、現在30代の世代とその親世代の結婚を取り巻く社会事情を探ってみました。親世代は青春期を1970年代の高度成長期に過ごし、見合い結婚が多く、若者を結婚に向かわせる社会の流れがありました。一方、現代の30代世代は社会に出る時期が就職氷河期といわれる時代でした。多くの企業が新採用を控えるなど、正社員になるのが難しく、そのため、収入の不安定さからも結婚に消極的になっているのではないでしょうか。

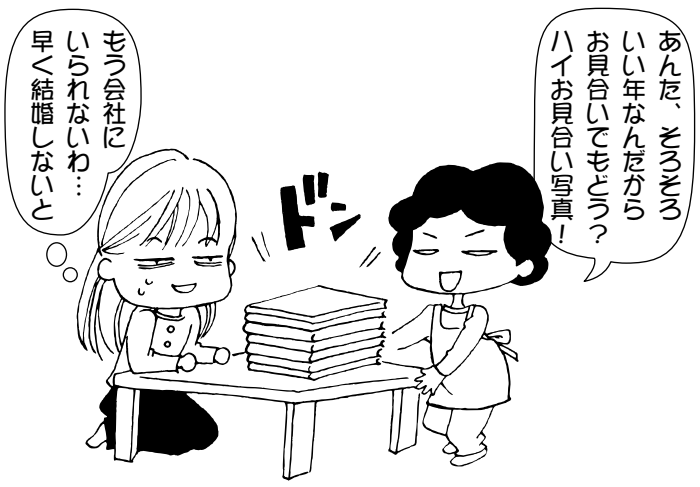
盛岡市男女別年齢別未婚率の推移



資料：
平成17年度国勢調査

■社会情勢に見る結婚事情の変容

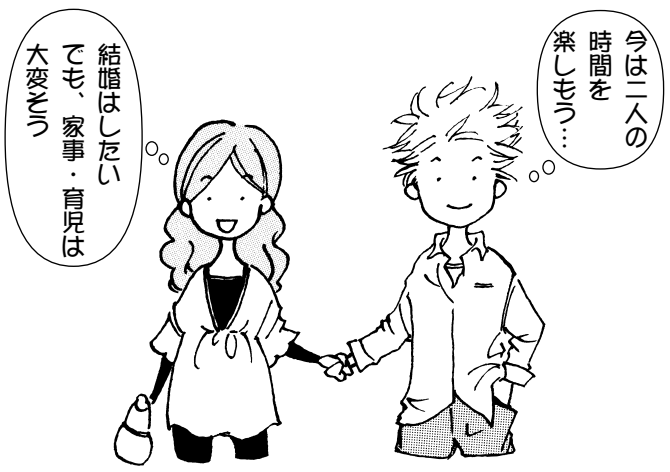
1970年代［親の結婚事情］



女性は男性社員の花嫁候補として採用され、お茶くみやコピー取りなどの仕事が多かった。周りから結婚することを期待され、女性は結婚を機に退社をする風潮が社会にあった。

1964（昭和39）年	東京オリンピック開催
1966（昭和41）年	国民生活白書、９割近くが中流意識を持つ
1970（昭和45）年	大阪万国博覧会が開幕
	第25回岩手国民体育大会秋季大会開催
1971（昭和46）年	松園ニュータウン郊外型住宅団地分譲開始
1973（昭和48）年	第二次ベビーブーム到来
1977（昭和52）年	東北自動車道一関～盛岡南間開通
1982（昭和57）年	東北新幹線　大宮～盛岡間開業
1986（昭和61）年	男女雇用機会均等法施行

2000年代［子の結婚事情］



会社は女性も男性も戦力として採用し、女性も責任がある仕事に就くようになった。パート・アルバイト・非正規社員といった、雇用が不安定で低収入の若者が増加。

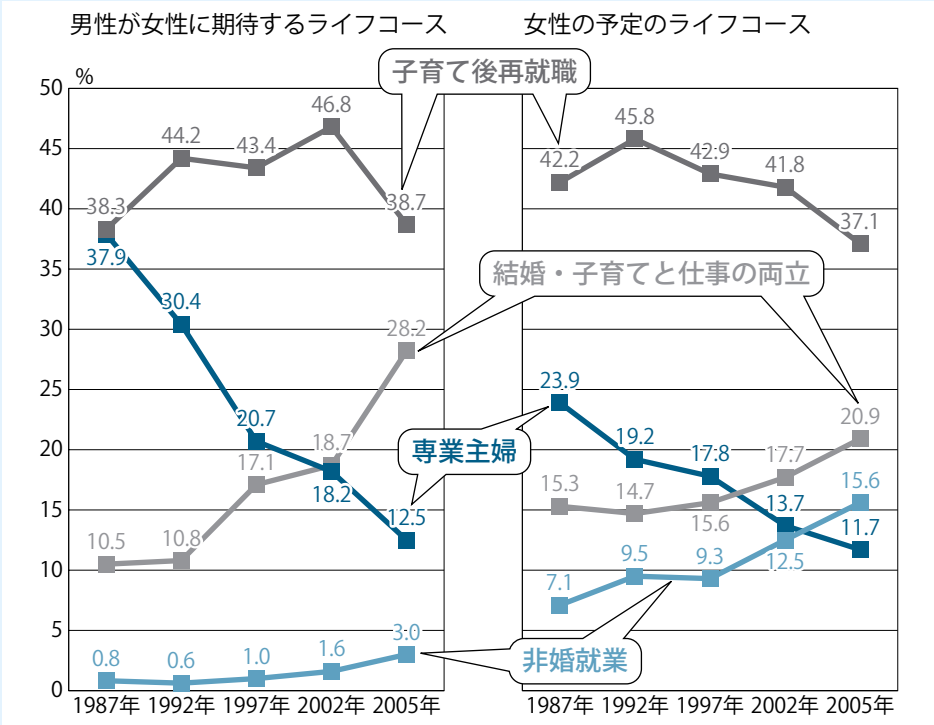
©TAKEHANA

1990（平成２）年	株価暴落、バブル崩壊始まる
1992（平成４）年	都南村と合併
1993（平成５）年	就職氷河期始まる（1993年～2005年）
	アルペンスキー世界選手権盛岡・雫石大会開催
1997（平成９）年	フリーターの数が150万人に達する
1999（平成11）年	携帯電話が急速に普及、ｉモード契約数300万台突破
2005（平成17）年	合計特殊出生率が過去最低1.26
2006（平成18）年	玉山村と合併
2008（平成20）年	リーマンショック（世界同時不況）

■変わる独身男女の意識

社会情勢が変化してきた中で、独身男女の結婚相手に対する意識がどのように変わってきたのでしょうか。

下のグラフは、18歳から34歳までの未婚の男女への意識調査で、女性の生き方に対して男女それぞれが持つ期待が、どのように変化してきたかを表したものです。女性も男性も、専業主婦を選ぶ割合が急激に低下する一方で、子育てと仕事の両立を志向する割合が上昇してきました。特に、妻にも働き続けてもらいたいと思っている男性が著しく増えています。



注：女性の予定のライフコースとは「実際になりそうだと考える」コース。
調査対象：独身者（未婚の男女18～34歳）
資料：国立社会保障・人口問題研究所「平成17年度出生動向基本調査（独身者調査）」

©TAKEHANA

婚活事業は人づくり

ＮＰＯ法人いわて子育てネット
副理事長・事務局長
両川（りょうかわ）　いずみさん（左）

世話好きマッチメーカー（仲人）
クラブ人材育成講座受講生
渡辺　瑠美子（るみこ）さん

世話好きマッチメーカー（仲人）クラブ人材育成事業に取り組んでいるＮＰＯ法人いわて子育てネット副理事長の両川さんと、昨年の受講生の渡辺さんに話を聞きました。

――婚活事業を始めたのはいつからですか

両川：婚活事業を始めたのは去年の10月からです。わたしたちは子育てを支援しているＮＰＯ法人ですが“良い子育てには良い家庭をつくること”という考えのもとに、始めた事業です。マッチメーカーの役割は、若い人の背中を押してあげたり、人を育てたりすることではないかと思います。

――マッチメーカーに応募したきっかけは

渡辺：「いい人がいませんか」と紹介を頼まれたことがあり、夫の後押しもあって応募しました。“結婚っていいよ”というのを伝えるのが、わたしの役割と思っています。結婚は、ときめきやわくわくという感じがないとなかなか踏み切れないですよね。

――女性にも働いてほしいという男性は増えていますか

両川：現在の社会情勢を考えると将来が分からないので、女性にも働いてもらいたいという人もいますね。今の若い男性は家事を上手にこなしている人も多いので、お互い協力できるのではないでしょうか。昔と違って女性を家政婦代わりのように思わなくなっていますが、中には親の介護を前提に結婚を考える人もいます。そういう人には、介護保険サービスを利用するなど時には専門家に任せ、家族は心の面をケアするようにとアドバイスしています。結婚しても個々が自立し、経済的にも精神的にも自主性を持って共に歩んでほしいです。

■新しい男女の生き方を見つけよう

結婚する、しないは「本人の気持ち」次第なのはいうまでもありません。ところが、結婚しやすさ、しにくさとなると、取り巻く社会や家庭の環境が大きく影響しているようです。現在30代の世代は、就職はもちろん結婚までも思うようにならない状況にあります。しかし、親世代の恋愛＝結婚という考え方とは違って、結婚にとらわれない恋愛をし、結婚の時期も自分の意思で決めるなど、人生の幅は広がっているといえます。そのような中で、男性は「家計を担い大黒柱でなければいけない」というプレッシャーなどから、結婚に消極的になるのは残念なことです。女性も家計を男性にのみ依存するのではなく、互いに協力して生活を営んでいくという意識が必要ではないでしょうか。また、男性は家事や育児に積極的に参加することも大事だと思います。

結婚観は、どのような生き方をしたいかという人生観そのものです。自分の価値観、結婚観を掘り下げ、新しい男女の生き方を見つけてみませんか。

～こちら編集室～

わたしが結婚した1970年代は、結婚をお膳立てしてくれる人がいて、親にもせかされ、縁談を断ると気まずくなったものでした。固定的な性別役割分担意識が強かった時代に生きた親世代としては、子どもには無理に結婚しろとは言わないけれど…結婚してほしい。同時に、結婚にこだわらないで仕事を続けてほしいというのも、親としての本音。揺れ動く親心です。（N.Y.）